

# 仮性包茎カテゴリーの使用法にみる男性身体の歴史社会学的考察

——1890-1940年代の包茎にかんする実態調査を中心に——

東京経済大学 澁谷知美

### 1 目的

この報告の目的は、近代日本における男性の性や身体の歴史社会学（澁谷 [2003] 2015, 2013）の試みのひとつとして、次の仮説を検証することである。「日本において「仮性包茎」という概念は、戦後に発達した美容整形業界が広めたものである。集客のため、「仮性包茎は恥ずかしい」という価値観がいわば“捏造”された。よって、戦前の、当該業界とは一線を画す医学界においては、「仮性包茎」という概念はさほど広まっていなかった。また、男性たちも仮性包茎を恥じていなかった」。

この仮説の妥当性を確認すべく、今回は、さしあたり、次の2つの作業仮説を検証する。①明治～昭和戦前期、「仮性包茎」というカテゴリーを、包茎に関心を持つ日本の医学者たちが使用する頻度は低い。②同時期、仮性包茎は、男性にとって恥ずかしいものではなかった。

### 2 方法

明治～昭和戦前期に発表された包茎にかんする論文のうち、包茎や非包茎のパーセンテージを明らかにしようとする実態調査をピックアップし、言説分析をおこなった。実態調査は11種であり、うち10種は医学者によるもので、1種は非専門家によるものである。

あわせて、同時代の通俗性欲学の文献や、新聞・雑誌の健康相談欄も補足資料として参照した。

### 3 結果

作業仮説①については、肯定的な結果が得られた。すなわち、11種の包茎をめぐる実態調査中、「仮性包茎」のカテゴリーを使用しているのは4種にとどまった。現代であれば「仮性包茎」と呼ばれるであろう状態は、「外観的包茎」などの名称で呼ばれていた。

作業仮説②については、否定的な結果が得られた。調査対象の文献のうち、包茎の価値観について言及する文献は4種あったが、うち2種において、包茎（≡皮被り）であることを日本の男性たちは恥じている、という言説が確認された。補足資料でも、恥とする言説が確認された。

いっぽう、作業仮説の検証とは別に、次の事実を確認した。(1)今日では同一のものと目されがちな「包茎」と「皮被り」を、異なる概念として把握する論者が複数いた。(2)包茎の度合いがもっとも高い状態と、もっとも低い状態の割合は、前者で0.8～36%、後方で1～47%と、調査ごとに開きがある。(3)包茎が増えているという認識を持つ論者が複数おり、「都市化によって精神の純粋性を失った青年たちがオナニーをするようになり、包皮が伸びたため」などと原因を説明をしている。

### 4 結論

今回の調査結果からは、冒頭の仮説は次のように修正されるべきことが示唆された。「日本において「仮性包茎」という概念は、戦後に発達した美容整形業界が広めたものである。集客のため、「仮性包茎は恥ずかしい」という、すでにあった価値観が“利用”された。よって、戦前の、当該業界とは一線を画す医学界においては、「仮性包茎」という概念はさほど広まっていなかった。いっぽう、男性たちの、仮性包茎を恥じる意識は存在した」。

### 文献

澁谷知美, 2003, 『日本の童貞』文藝春秋。(再録: 2015, 『日本の童貞』河出書房新社)  
——, 2013, 『立身出世と下半身——男子学生の性的身体の管理の歴史』洛北出版。